九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

模倣の社会的意義を見極める方法を考える

寺本，振透

https://hdl.handle.net/2324/1801795

出版情報：pp.683-701, 2017-03-30. 信山社
バージョン：
権利関係：(c)編著者, 2017

第16章　模倣の社会的意義を見極める方法を考える

寺本振透

I　オマージュ？ パロディ？ あるいは凡庸な模倣？

私のてもとに、魔夜峰央『パタリロ！ 選集50　マリネラの吸血鬼の巻』（白泉社文庫、2014年）のデジタル版（ebookjapan.jpによるディストリビューション）がある。その7頁から始まる「マリネラの吸血鬼」を見ると、冒頭に、次のようなエピソードが紹介されている。

> 魔夜峰央氏は、Agatha Christieの作品へのオマージュのつもりで「マリネラの吸血鬼」を描いて発表した。この漫画作品は、当初、「パタリロ！」単行本第4巻に収録されていた。ところが、ある大学のミステリー研究会から「盗作だ、クリスティー財団に訴える」といって非難されたので、いったん、この作品を第4巻からはずすことにした。しかし、あとでクリスティー社にお伺いをたてたところ承諾が得られたので、あらためて、この作品を文庫版50巻に載せることにした。

そして、この巻では、'「マリネラの吸血鬼」Based on "WIRELESS" from The Hound of Death and other stories by Agatha Christie, Copyright (C) 1933 by Agatha Christie, Permission arranged with Agatha Christie Ltd.'というクレジットが付けられている。作家がオマージュのつもりであったとしても、世間からは盗用だといって非難されることがあるという例である。

東京都世田谷区砧に、隈研吾氏の設計によるM2ビルという建物がある（図表1）。この建物の外観は、古代ギリシア建築のイオニア式へのオマージュか、パロディか、よく知られた装飾様式の特に珍しくもない模倣か、あるいは、古代ギリ

図表1　M2ビル

シア建築へのあこがれの暴走か？設計者が有名な建築家（隈研吾氏）だと知ると、きっとオマージュかパロディか機能的に過ぎる現代の建築への反逆か、ともかくもそれなりに高尚な意味があるのだろうと想像したくなる。だが、そうと知らなかったら、違う感じ方をするかもしれない。

過去の作品の表現が新しい作品の表現として利用されたとき（以下、無意識の利用や、換骨奪胎的な利用も含めて、便宜的に「模倣」と呼ぶ）、そこに何か新しい意味を見出すかどうかというのも、相当に主観的な問題であるかもしれない。「新しい作品の作者は、どういうつもりで、過去の作品を模倣したのだろうか？」といった内心の問題は、観察者にはよくわからない。一般の観察者の感じ方も、先入観からは自由であり得ないし、そもそも、先入観にとらわれているからこそ人間らしい観察者であるのかもしれない。きっと、専門家も、「私は専門家なのだから、先入観に縛られていると他人から思われるような感じ方をしてはならない」という先入観に縛られているにちがいない。その意味では、“The more transformative the new work, the less will be the significance of other factors, like commercialism, that may weigh against a finding of fair use.”（下線は筆者）とした *Campbell v. Acuff-Rose Music*, 510 U.S. 569（1994）の判断も、その事件ではなんとか巧みに結論を引き出せたように見えるけれども、他の件でもそう巧くいくだろうか、という疑問を免れない。なぜなら、新しい作品が“transformative”なのかどうかという判断自体、とても主観的であるに違いないのだから。主観的な判断を忌避するのは、いかにも法律家らしい態度のようにも見える。だが、法律は、現実の社会を前提としてそこに介入しようとするものである。法律家自身も含めて、私たちのすべてが先入観にとらわれ、主観的であることを受け入れたうえで、どうすれば、先入観から逃れることのできない、主観的であるほかない私たちの間の摩擦を緩和できるだろうか、と考えるべきだろう(1)。

(1)　どれほど私たちが先入観にとらわれているかをわかりやすく説明してくれる書物として、例えば、Kahneman (2012)がある。また、主観的であるほかない私たちが構成員である社会に対して法律をどのように作用させるかについて導きを与えてくれる書物として、例えば、Thaler & Sunstein (2009)がある。

Ⅱ　技術分野のプラクティスと非技術分野の雰囲気の違い

1　技術分野のプラクティス

先行業績の利用あるいは模倣が、創造的な活動のほとんど不可欠な一部をなすことは、おそらく、技術分野に関しては、強く認識されているように思われる。もちろん、模倣者に対して先行者が排他的権利を行使するかもしれないことは、予定されている。それでも、先行業績を利用することが日常のこと、という前提で、法律が設計され、取引が設計されているようである。

例えば、*Scotchmer (2004)*は “Standing on the Shoulders of Giants: Protecting Cumulative Innovators” と題する章を置く。特許法は、特許出願される発明に先行技術があることを前提とした建付けを持つ（例えば、我が国の特許法 29 条は、先行技術に照らして、発明の特許要件としての新規性と進歩性が判断されることを明らかにしている。また、先行技術の開示を出願人に対して求める同法 36 条 4 項 2 号、先行技術に対する特許権とそれを利用する新しい特許発明の権利者の調整を用意する同法 92 条等）。また、パテント・プール、クロス・ライセンス、互いのプロダクトを利用し合いながらインクリメンタルに進歩するコンピュータ・プログラム開発の実情に適した GNU General Public License に代表されるオープンソース方式のソフトウェア・ライセンス等が広く利用されている。

2　非技術分野の雰囲気

文芸、アート等の非技術分野(2)では、技術分野に比べて、創作活動における先行作品の利用が、先行作品の作者又は公衆に嫌悪される例が目立つようにも思われる(3)。

---

(2)　建築や工芸などのように、技術を利用する分野も含まれるが、しかし、ここで問題にするのは、できあがったものの外観である。技術的な要因が外観の自由度を制約することはあるものの、もっぱら人為的な創作として外観がかたちづくられるだろうと推測する。

(3)　このことについて、確たる統計上の根拠を持っているわけではない。筆者の思い過ごしであるかもしれない。検索技術の進歩と普及、並びに、SNS (Social Network Service) の普及等による急速な情報拡散によって、そのような例が目立つだけなのかもしれない。もっとも、長崎地佐世保支判昭和 48 年 2 月 7 日・無体集 5 巻 1 号 18 頁（博多人形赤とんぼ）、神戸地姫路支昭和 54 年 7 月 9 日・無体集 11 巻 2 号 371 頁（仏壇装飾）、大阪地判平成 25 年 8 月 22 日・裁判所ウェブサイト（亀甲墓屋根）、知財高判平成 27 年 4 月 14 日・裁判所ウェブサイト（平成 26 年（ネ）第 10063 号）（幼児用椅子）等のように工芸

図表２　三つ巴、左三つ藤巴、三つ割り銀杏

図表３　丸に花菱，丸に梅鉢，丸に剣片喰

とはいえ、後行の作品が先行の作品を模倣することが珍しくない分野もある。また、模倣をする際の作法めいたものが示される例もある。例えば、家紋のデザインでは、同じようなモチーフを使いながらたくさんの派生系が作られてきたようである。三つの同じ形を一定の回転方向に組み合わせたものでも、おそらくは基本型だろうと思われる三つ巴に加えて、左三つ藤巴、三つ割り銀杏その他無数の家紋がある（図表2）。植物の葉や花弁を並べて上から見たような図形を丸で囲んだ家紋も、丸に花菱、丸に梅鉢、丸に剣片喰（けんかたばみ）その他無数にある（図表3）。また、和歌の世界では、本歌取りがなされたり、同一または類似の表現がしばしば用いられることが、よく知られている。例えば、小倉百人一首の「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかも寝む」（91番 後京極摂政前太政大臣、『新古今和歌集』秋518番）は、「あしひきの山鳥のをのしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む」（柿本人麻呂、百人一首3番、拾遺和歌集 恋三）と「さむしろに衣かたしき今宵（こよひ）もや我を松覧（まつらむ）宇治の橋姫」（古今集　巻十·四　恋四　よみ人しらず）を本歌としているとされる[(4)]。また、尾崎雅嘉『百人一首一夕話』（江戸後期）には、「しかるに万葉の歌に、 我が恋ふる妹に逢はさず玉の浦に衣片敷き独りかも寝ん　とあり。下の句全く同じ事なり。契冲はこの歌を引いて万葉は広きものなれば、下句この全句なる事を覚え給はざりけるなるべしといへり。真淵は万葉の句を用ひられしといへり。いづれにしても、この歌の難とすべきにはあらざるなり。」とある[(5)]。そして、藤原定家によるとされる『毎月抄』に「また、本歌とり侍るやうは、さきにもしるし申し候ひし花の歌を、やがて花によみ、月のうたを、やがて月にてよむ事は、達者のわざなるべし。春の歌をば、秋冬などによみかへ、

や産業デザインの分野における先行作品の模倣が疑われて法的紛争に発展する例が少なからず存在してきたことは確かである。

(4)　例えば、有吉保全訳注『百人一首』（講談社学術文庫、1983年）377頁。

(5)　古川久校訂、岩波文庫版（1973年）193-194頁。

戀の歌などを雑や季の歌などにて、しかもその歌をとれるよと、きこゆるやうによみなすべきにて候。本歌の詞をあまりに多く取る事はあるまじきにて候ふ」とある（あたかも、先行作品を利用するときは *transformative* であれ、といっているかのようである）ように、本歌取りの仕方について一定の作法あるいはスマートな本歌取りの仕方が示されていると思しき例がある。

このように、非技術分野における模倣に対する人々の態度は、歴史的にも、現代においても、肯定的な態度と否定的な態度との両様（あるいは、これらの間のスペクトラム）を示す。しかし、例えば、著作権法は、模倣が創作行為の一部をなすであろうことを正面から肯定的に想定する条文を用意しているわけではない(6)。

Ⅲ　模倣に対して否定的な態度が引き起こす社会的な負担

法制度を議論する私たちは、模倣に対して否定的な態度をとることについて、その道徳的な良し悪しを評する立場にはない。しかし、そのような態度が原因となって生ずる社会的な負担がときとして重すぎないかどうかについて議論することは、私たちの仕事である(7)。

(6)　確かに、いくつかの裁判例は、先行作品を利用した創作が先行作品に対する著作権侵害にならないという結論を示す。しかし、それらは、通常、利用されたのがアイディアであるから著作権で保護される表現にはあたらないとか、利用されたのが慣用的な表現であるから著作権では保護されないといった理由に基づく（例えば、知財高判平成 26 年 2 月 19 日・平成 25 年（ネ）第 10070 号・裁判所ウェブサイト、東京地判平成 24 年 2 月 28 日・平成 20 年（ワ）第 9300 号・裁判所ウェブサイト、知財高判平成 21 年 9 月 16 日・平成 21 年（ネ）第 10030 号・裁判所ウェブサイト、東京地判平成 19 年 7 月 25 日・平成 19 年（ワ）第 7324 号・裁判所ウェブサイト、東京地判平成 17 年 12 月 26 日・平成 17 年（ワ）第 10125 号・裁判所ウェブサイト等）。とりわけ、著作権法が技術分野に適用される例ともいえるコンピュータ・プログラムの著作物については、原告のプログラムと被告のプログラムに共通する部分に表現上の創作性が認められないから著作権侵害にはあたらない、といった筋立ては珍しくない（例えば、知財高判平成 26 年 3 月 12 日・平成 25 年（ネ）第 10008 号・裁判所ウェブサイト、知財高判平成 23 年 2 月 28 日・平成 22 年（ネ）第 10051 号・裁判所ウェブサイト等）。だが、非技術分野においてまだ「枯れていない」表現を利用して創作することについては、なかなか、著作権法の文脈では、正面から肯定することが難しそうではある。

(7)　「社会的な負担が重すぎないか」という、曖昧、迂遠あるいは責任感に欠ける表現について、弁解をしておく。それが、経済学におけるどの種類の「費用」にあたるのか、また、金銭で評価できるのかどうか、あるいは、社会ネットワークにおける node（頂点）

1　社会的な摩擦が引きおこす負担

模倣は社会に遍在する。だから、模倣に対して否定的な態度を持つ者が多く存在することで、彼らと、模倣者あるいは模倣者の作品を利用したり楽しんだりする者との間で等、社会のあちらこちらで摩擦を生むことになる(8)。模倣者とそれを非難する者それぞれに応援団がついて摩擦をどんどん大きくすることも、それぞれの側に属する者の負担は増加する（本人は、好き好んでそのような行為をしているのかもしれないが）。

もっとも、これらの負担の増加をもって、直ちに、社会的な負担が「重すぎる」というわけにはいかないかもしれない。このような負担の増加があるからこそ成立するビジネス、職業、エンターテインメント(9)もあるのだから。

2　発生した摩擦を解消しようとする努力が引きおこす負担

模倣に対して否定的な態度を持つ者との摩擦が引きおこす負担が耐え難いと感じた(10)とき、模倣者、模倣者の作品を利用する者、模倣者の作品を利用しよう

同士の distance（距離）を短縮することの妨げになっているのかどうか、など様々な不都合を区分せずに粗っぽく議論するために「負担」という曖昧な表現を用いた。また、模倣に対して否定的な態度を示す者と直接に取引する者の負担も、そのような態度を示す者との取引関係が無い者（というよりは、その者からのいくつもの取引関係を経て間接的につながる者）も、すべて含める意味で「社会的な」という表現を用いた。取引に関わる者がどんな態度をとろうとも、その態度が何らかの負担を生むことになるはずだから、負担の発生自体を非難するわけにはいかない。そこで「重すぎないか」という表現を用いた。もっとも、負担が過度であるかどうかを判断する方法はおろか、負担の重さを測る方法の提案にすら、私は到達していない。さらに、模倣に対して否定的な態度が有害なことも有益なこともあると思われるから、「ときとして」という限定を付けた。

(8)　これ自体は、とりたてて特別な出来事ではなささそうである。新しいことが忌み嫌われた時代ならば、こうも言えただろう。創作は社会に偏在する。だから、創作に対して否定的な態度を持つ者が多く存在することで、社会のあちらこちらで摩擦を生むことになる、と。

(9)　20 20年に東京で開催される予定のオリンピックのロゴとそのデザイナーに関する、先行作品を模倣しているのではないか、という疑いに発した摩擦は、まさに、国民的エンターテインメントとも言うべき盛り上がりをみせた。例えば、http://www.asahi.com/special/timeline/toky o20 20 emblem/を参照おそらくは、このような騒動にも、それなりの経済効果があっただろうと思われる。

(10)　心理的な問題を抜きにして考えるならば、そのような摩擦を続ける方が、摩擦を解消するよりも、負担が小さいことも、十分にあり得る。しかし、現実の人間や、人間によって構成されている企業、政府機関、団体等の動き方には、心理的な問題が強く関わる（例えば、*Kahneman (2012)* 参照）。このような現実を強調するために、「考えた」では

としていた者等は、その摩擦を解消ないしは解決しようとする。そのために、摩擦を法的な紛争として再構成したり、裁判にしたり、あるいは裁判外で処理したりするのにも、当事者のみならず、代理人や紛争処理機関の負担を増加させることになる。また、模倣者ならば創作のやり直し、利用者ならば利用する作品の探索と調達のやり直し等によって負担が増加することになる。

しかし、ここでも、これらの負担の増加をもって、直ちに、社会的な負担が「重すぎる」というわけにはいかない。このような負担の増加は、一方では、いくつものビジネスや職業の収入源となるのだから。また、利用者が利用する作品の探索と調達をやり直すことは、新たな創作者に世に出る機会を与える可能性があるのだから、悪いことばかりでもない。

3　摩擦を事前に回避しようとする努力がひきおこす負担

事業を行う人々は、模倣に対して否定的な態度を持つ者との摩擦を事前に回避するために、先行する作品を調査したり、先行作品とは異なる特徴をもつ作品を意識的にデザインしたりするかもしれない。これらのことは、彼らの負担を増加させるであろう。

しかし、やはり、これらの負担の増加をもって、直ちに、社会的な負担が「重すぎる」というわけにはいかない。先行作品を調査したり、先行作品と後行作品の類似または相違を評価したりすることは、いくつかのビジネスや職業の収入源となる。また、意図的に先行作品から離れようとすることは、世の中に拡散する作品の多様性を高めるかもしれない。

4　模倣の不足がひきおこす負担

発生した摩擦を事後に回避しようとする努力も、摩擦を事前に回避しようとする努力も、世の中に出回る模倣の数が減ったり、模倣の拡散が抑制されたりすることにつながると思われる(11)。

しかしながら、現時点で主流をなす表現様式に、新しい表現様式がとってかわるためには、誰かが新しい表現様式を世に出した後、それを模倣した表現様式を発信する者がなるべく多く現れることが必要であるか、あるいは、少なく

なく、「感じた」という表現を用いた。

(11)　確かに、先行作品について権利を持つものから許諾が得られる場合もあるだろうが、模倣の数を維持したり、模倣の拡散を促進するほどには多くの許諾がなされるわけではないだろうと推測する。しかし、推測だから間違っているかもしれない。

図表4　モデルにおける社会の構成員の役割と、対応する色の設定

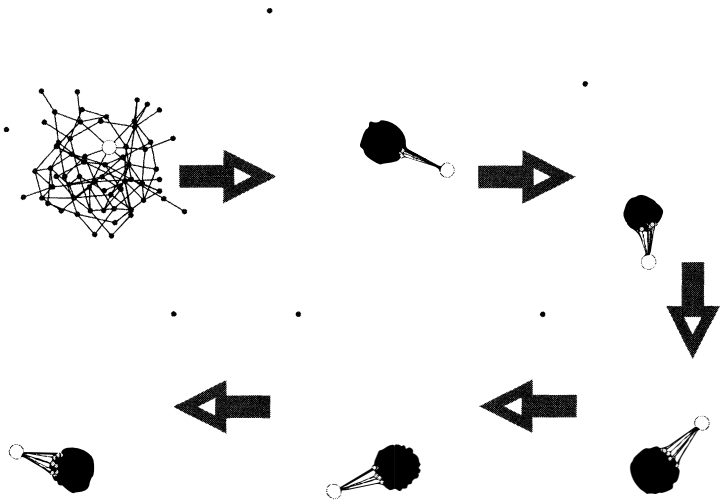
		古くからの表現様式の発信者になれる	古くからの表現様式を発信して他の actor に受信された後の色	古くからの表現様式の受信者になれる	古くからの表現様式を受信した後の色	新しい表現様式の発信者になれる	新しい表現様式を発信した他の actor に受信された後の色	新しい表現様式の受信者になれる	新しい表現様式を受信した後の色
黒色	●	YES	黒色	YES	黒色	NO	N/A	YES	薄い灰色
濃い灰色	●	YES	黒色	YES	濃い灰色	NO	N/A	YES	薄い灰色
薄い灰色	●	NO	N/A	YES	濃い灰色	YES	白色	YES	薄い灰色
白色	○	NO	N/A	YES	濃い灰色	YES	白色	YES	白色
ユニークな創作者とその模倣者	○ △	NO	N/A	NO	N/A	YES	白色	YES	白色

とも有効だろうと思われる。この予想にある程度のもっともらしさがあることを示唆するネットワーク・モデルを試みに用意してみた[12]。このモデルは、古い表現様式が支配的である社会（モデルでは、構成員の数が64）において、ユニークな創作者が一人だけで新しい表現様式を発信するとき、模倣して新しい表現様式を発信する者が三人、六人または九人のときで、新しい表現様式の拡散の程度の違いを、社会ネットワーク分析[13]で利用される社会ネットワーク図（sociograph または sociogram）の様式で示すことを目的とする。モデルでは、古い表現様式を受入れている者（発信はしていない）が「濃い灰色」の点で、古い表現様式を発信している者が「黒色」の点で、新しい表現様式を受入れている者（発信はしていない）が「薄い灰色」の点で、新しい表現様式を発信している者が「白色」の点で示されるようにした。新しい表現様式を発信するユニークな創作者は「白色」の丸で示され、その模倣者は「白色」の三角で示されるようにした。そして、「薄い灰色」または「白色」の点が増える（あるいは、なかなか増えない）状況を示すことができるようにしてみた（図表4）。このモデルは、模倣者（つまり、「白色」の三角）の数が多いほど、「薄い灰色」または「白色」

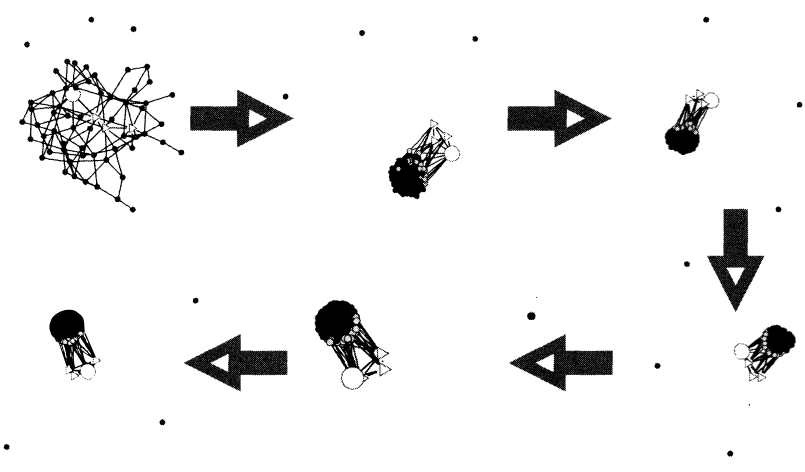
(12)　このモデルは、JSPS 科研費 25285032（平成25年度（2013年度）基盤研究（B）「クラウド・コンピューティング時代の情報群の法的保護と管理の探求」）の助成を得て準備したものの1つである。モデルを作るためのコードは、本稿末尾に示す。本書の読者の関心外と思われるから、本文ではモデルの詳しい説明は省くが、コードのコメント行にはモデルの説明を示してある。

(13)　社会ネットワーク分析（Social Network Analysis）と、そこで使われるツールについては、Freeman（2004）、Scott（2013）、Prell（2012）、鈴木（2009）等を参照。

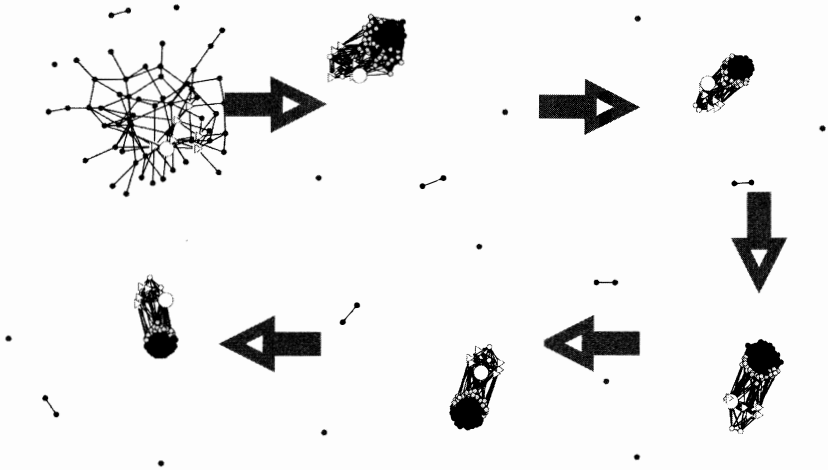
図表 5　模倣者の数を 0 としたモデル



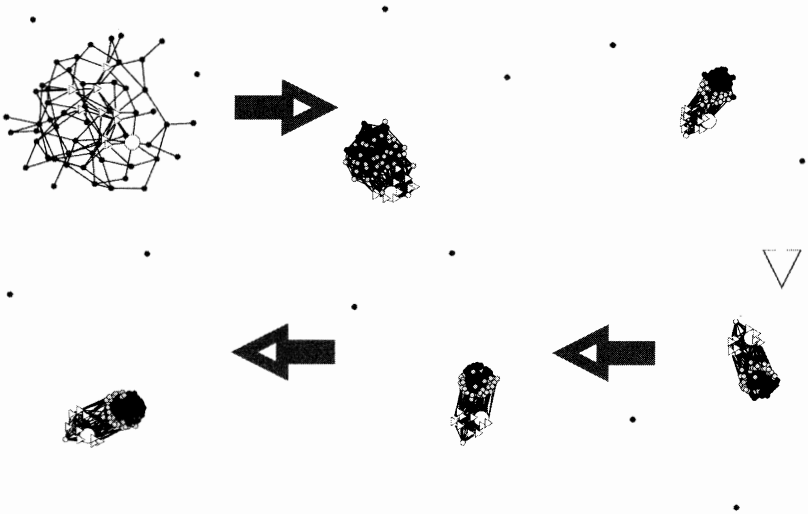
図表 6　模倣者の数を 3 としたモデル



図表７　模倣者の数を６としたモデル



図表８　模倣者の数を９としたモデル



の点が着実に増えていくのではないか、という想像を可視化している（図表5、6、7、8）。なお、モデルはモデルでしかない、つまり、現実そのものの反映ではなく、むしろ、現実を観察するときの視点（ここでは、社会に模倣を流通させる発信者の数や発信力[14]が、新しい表現様式の普及に影響するのではないだろうか、という視点）に見当をつけるための道具である。

模倣が社会的摩擦を引き起こすことが、社会にとって好ましくないことなのかどうかについては、よくわからない。しかし、少なくとも、新しい表現形式を社会に拡散して新しいトレンドが生まれることが好ましいことだ、と前提するならば（この前提がいったいどれくらいの割合の人々に受けいれられるのかはよくわからないものの、多くの人々の生活とビジネスがトレンドの変遷に依存して行われているようにも見える）、模倣が引き起こす社会的摩擦をある程度緩和する方法を考えることは、有意義であるように思われる。そして、模倣が引き起こす社会的摩擦が耐え難いと感じられるときに創作者及び企業が模倣を回避すると仮定するならば（なお、そのような例がしばしば発生するという認識は広くシェアされていると思われるが、社会に大きな影響を与えるほどに、そのような回避がなされているかどうかについては、調査できていないし、影響の大小を推し測る方法も開発できていない。だから、ここも、仮定に仮定、あるいは、憶測に憶測を重ねるものではある）、模倣の回避によって新しい表現形式の拡散が妨げられることがある程度は予想されるからだ。

Ⅳ　模倣の社会的意義を見極めるために、何を観察するか？

模倣が社会的摩擦を引き起こし、それが緩和されていくプロセス[15]を観察することによって、模倣の社会的意義を見極めることができるかもしれない。

1　社会的摩擦が緩和されるプロセスから見えるもの

模倣について肯定的な態度と否定的な態度（そして、それらの間の無限のスペクトラム）が存在すること、そして模倣が社会的摩擦を引き起こす例がしばし

(14)　発信力の強弱は、例えば、便宜的に、eigenvector centrality を使って示すことができる。eigenvector centrality については、例えば、Bonacich（1987）、鈴木（2009）p. 48 等を参照。

(15)　欲をいえば、さらに、特に摩擦を引き起こしていなかった模倣が、何かのきっかけで摩擦を引きおこすようになるプロセスが前段階にある可能性もあるから、これも観察の対象に組み込むと興味深いかもしれない。

ば見られることは確かである。一方で、もし、社会の多くの人々が模倣の社会的意義を認めていないとすれば、そのような社会的摩擦は、模倣を社会から消し去ることで（あるいは、そこまで極端でないにしても、模倣の社会的な影響を極めて小さくしまうことで）解消されるのではないか、とも思われる。しかし、現実には、しばしば、いつの間にか、模倣が社会に受け容れられていくことで、社会的摩擦が緩和されていくこと（あるいは、逆かもしれない。社会的摩擦が緩和されることで、模倣が社会に受け容れられていくのだろうか？）が多くあるようにも思われる。でなければ、トレンドとか、ファッションとかいったものは成り立たないだろう。

だとすると、模倣によって社会的摩擦が引き起こされ、その後、それが徐々に緩和されていくプロセスを観察することによって、社会を構成する人々が、模倣の社会的意義[16]をどのように理解し、また、どのように発見していくのかを、知ることができそうである。

また、これらのことを知ることができれば、法制度の設計という観点からは、個々の模倣の社会的意義が発見されることを促進することによって、社会的摩擦が緩和されることを促進するような仕組みを用意できるかもしれない、という期待も持てる。

2　観察の方法

同時代的な事実を観察して記述しようとしても、今まさに動いている事実に対する私たち観察者自身の先入観によって、それは、相当に歪められたものとなるかもしれない。一方、歴史的な事実を観察して記述するときは、観察者がより客観的でいることができそうではあるものの、現代において重要と思われるような要素が抜け落ちるかもしれない。おそらくは、歴史的な事実と同時代的な事実の双方を観察すべきなのだろう。

また、漫然と事実を観察しても何も見えてこない（見ようとしたことしか見えない）だろうとは思われる。社会的摩擦が生まれ、それが緩和されていくメカニズムについて、何らかの仮説を持ったうえで、事実を観察することが、おそ

---

⑯　社会が、自分が合理的であるかのごとく振る舞おうとはしない人々と、合理的であることを装おうべく日々努力してはいるものの実はまったく合理的ではない（この本を書いたり読んだりしている）私たちからなりたっているとすれば、社会的意義といっても、合理的な説明に基づく社会的意義であるとは限らない。私たちにとって社会的意義がありそうに見えるかどうかの問題であるにちがいない。

らくは、生産的だろう。もちろん、常に、柔軟に仮説を修正する準備は必要である。

さらに、社会における私たちの集団的な動きについては、社会実験をすることが難しいという制約があることにも留意しなければならない。

そうしてみると、「とりあえずの仮説→実態調査→実態を単純化したモデルによる検討→より改善された仮説の提示→さらなる実態調査……」というサイクルで社会的な事実の観察、記述と分析を行うことが現実的であるように思われる。そのうえで、次のようなことが発見できれば、それなりの成果を得たといえるかもしれない。

(1) 模倣が深刻な社会的摩擦を引き起こしたいくつもの事例に共通する要素は何か？
(2) 模倣が深刻な社会的摩擦を引き起こさなかったいくつもの事例に共通して、当該要素は確かに、まったく又はほとんど、発見されないか？
(3) 模倣が引き起こした深刻な社会的摩擦が緩和されたとき、当該要素は確かに、まったく又はほとんど見られなくなっているか？

もっとも、これらの作業が首尾よくなされたとしても、当該要素を弱める試みによって、摩擦も軽減されるだろう、とは断言できない。なぜなら、当該要素と摩擦のどちらが原因でどちらが結果なのか、あるいは、別の原因によって同時にその要素と摩擦とが引き起こされたのかは、よくわからないからだ。それでも、模倣に起因する社会的摩擦と相関関係を持つ要素の目星がつくだけでも、一歩前進とは言えるだろう。

3 とりあえずの仮説

現時点では、そもそも、仮説らしい仮説を提案するほどの調査を、私は、始めていない。あるのは、ただただ運と人脈によって得られた、元実務家としての限られた経験だけである。その経験から、粗っぽい直感によって、とりあえず、次のような仮説をたててみる。

(1) 表現の「模倣」は、模倣者(R)による模倣と、模倣された表現の更なる伝播によって新たな価値が付加されることが、当初の情報発信者(O)によって認識されないときに、O・R間の摩擦を、しばしば引き起こす。
(2) そのような付加価値の存在について認識が共有されると、O・R間の摩擦が解消されやすい。

(3) 表現の「模倣」は、模倣者(R)による模倣と、模倣された表現の更なる伝播によって新たな価値が付加されることが、公衆[17]によって認識されないときに、公衆のRに対する強い非難を、しばしば引き起こす。
(4) そのような付加価値の存在を公衆が認識すると、非難が収束しやすい。
(5) 上記の付加価値は、新しい情報の付加の他に、Oが想定していなかった集団への情報伝播、新しい世代への情報の継承等、受益者の拡大が含まれる。
(6) 紛争、集中的な非難等の社会的摩擦を予防又は緩和するために、上記(2)及び(4)に示す認識共有を促進する仕組みが有効である。
(7) 引き起こされた紛争、集中的な非難等の摩擦を効率的に収束するために、上記(2)及び(4)に示す認識共有を促進する仕組みが有効である。

4　観察の場の候補

散発的な紛争事例の研究ではなく[18]、分野横断的に、歴史的視座を導入し、現在進行形の実務も視野に入れ、表現の「模倣」の効用と同時にそれが引起こす社会的摩擦さらには摩擦の解消を観察する場として、例えば、つぎのようなものが現実的な候補となるかもしれない。

(1) 現代の事象の調査

(a)　例えば、ソーシャル・キュレーション・サイト（Social Curation Site または SCS）[19]のように、もとの情報へのリンク、もとの情報のコピー若しくは要約などによって成り立つウェブサイトを素材として、(i) 模倣がつくりだす付加価値、(ii) 模倣に関わる社会的摩擦が発生する状況、及び(iii) 模倣に関わる社会的摩擦が緩和されていく状況を観察すること。SCS に示される情報のほとんどが、どこかから持ってきたものだと思われるから、模倣に関わる社会現象が

---

[17] 社会をネットワークで表現すると、公衆は、多くの node が互いにつながった関係性によって示されることになる。だから、観察可能なのは、公衆全体としての認識ではなく（そのようなものは、仮想的にしか存在しない）、公衆に含まれるであろう個々の node（需要者、供給者、傍観者など様々な立場の人々が含まれる）の認識だということになる。当然、それぞれの node が付加価値を感ずる文脈は異なってくる。例えば、供給者は、模倣の拡散によって「本物」に対する需要が顕在化することをもって付加価値と認識するかもしれない。また、例えば、需要者は、みんなが模倣をすることによる安心感を付加価値と認識するかもしれない。

[18] 散発的な紛争事例ならば、実務経験、裁判例、ニュースなどで情報が入ってくる。

[19] 例えば、digg.com や matome. naver. jpがその典型である。pinterest. com は画像に特化したものとして有名である。

頻繁に起こることが観察できるのではないかと予想する。とりわけ、料理、旅行、健康等に関わる記事は、よく似た記事が同時に大量に出回っているように思われる。そうだとすれば、模倣の経路と、模倣に関する周囲の反応などを追っていきやすいのではないかと思われる。また、こうした場面での模倣については、社会的摩擦が生じている事例と、そうでない事例とがみられ、また、摩擦が生ずるにしても、深刻な場合から軽微な場合まであるだろうと思われる。

(b) 一方では、明らかに先行事例の模倣が習慣的に行われているのに、摩擦が事実上存在していないように見えるのが、有価証券報告書におけるリスク・ファクターの書き方や、ベンチャーの資金獲得のための事業計画書である。ここでは、模倣がつくりだす付加価値の認識が関係する人々によってシェアされている状況を観察できそうに思われる。

(2) 歴史的な事象の調査

先に例を挙げた和歌や家紋の他、近代の日本やイギリス[20]における外国語やラテン語の翻訳に由来する様々な表現の流布は、比較的トレースがしやすい模倣の展開の例を私たちに提供してくれるかもしれない。

V 私（たち）は、まだ、何も、わかってはいない。

事実 ── それも、私たちが模倣をどう受けとめているのか、ということについての事実 ── を観察して記述することなしに、法律が模倣をどう扱うのか、という議論をすることは、私には、急ぎすぎであるようにも思われる。まずは、事実を観察して記述するという、法律家にとっては不慣れな作業（法学部や法科大学院は、学生に対して、事実を観察して記述する方法をあまり教えない。法律実務家は、それをOJTで学ぶが、純粋な法学研究者のほとんどは、生涯、それを学ばないままに終わる）をする必要があるのではないだろうか。

もっとも、法律実務家や法学研究者が、法律が模倣をどう扱うかについて議論することが、無駄というわけでもない。それぞれの発言は、「私たちが模倣をどう受けとめているのか」について観察可能な事例のひとつとしてカウントされることになるだろう。

---

[20] Otto Jespersen, Growth and Structure of the English Language, 10th ed., Chicago University of Chicago Press, 1982 等参照。

（付）モデルを用意するためのコード（R による）〔各ページ、左下から右上へ〕

```
# use sna and igraph
# default <-c(size, TP, ritsuko, viralNum-
ber, τ , nInstance, echo)
# without imitators
# default <-c(64, 0.05, 1, 0, 1, 50, 2)
# with 3 imitators
# default <-c(64, 0.05, 1, 3, 1, 50, 2)
# with 6 imitators
# default <-c(64, 0.05, 1, 6, 1, 50, 2)
# with 9 imitators
# default <-c(64, 0.05, 1, 9, 1, 50, 2)
# the number of nodes
size <-default[1]
# the probability that a tie (bi-directional)
exists between a pair of actors.
TP <-default[2]
# societyS as a random network.
societyS <-rgraph(size, tprob=TP, mode="
graph")
tiff(file="default.tiff")
gplot (societyS, gmode=" dgraph", label.
lty=0)
dev.off()
societySg <-graph. adjacency (societyS,
mode="undirected")
evcS <-evcent(societySg)$vector
evcSS <-evcS
aMelchior <-which.max(evcSS)
evcSS[aMelchior] <-0
aBalthasar <-which.max(evcSS)
evcSS[aBalthasar] <-0
aCasper <-which.max(evcSS)
evcSS[aCasper] <-0
bMelchior <-which.max(evcSS)
evcSS[bMelchior] <-0
bBalthasar <-which.max(evcSS)
evcSS[bBalthasar] <-0
bCasper <-which.max(evcSS)
evcSS[bCasper] <-0
cMelchior <-which.max(evcSS)
evcSS[cMelchior] <-0
cBalthasar <-which.max(evcSS)
evcSS[cBalthasar] <-0
cCasper <-which.max(evcSS)
evcSS[cCasper] <-0
ritsuko <-which.max(evcSS)
fashionable <-c(rep(1,size))
fashionable[ritsuko] <-0
if (default[4]> =3){
fashionable[aMelchior] <-0
fashionable[aBalthasar] <-0
fashionable[aCasper] <-0}}
if (default[4]> =6){
fashionable[bMelchior] <-0
fashionable[bBalthasar] <-0
fashionable[bCasper] <-0}
if (default[4]> =9){
fashionable[cMelchior] <-0
fashionable[cBalthasar] <-0
fashionable[cCasper] <-0}
# the vector of fashionably sanitized nodes
sanitized <-c(rep(0,size))
for (i in 1:size){
if (fashionable[i]==0){
sanitized[i] <-1}}
# the vector of possible sanitizer nodes
pSanitizer <-sanitized
# the vector of echoSanitizer
echoSanitizer <-pSanitizer
# the vector of conservatively infected
nodes
infected <-c(rep(1,size))
for (i in 1:size){
infected[i] <-infected[i]*fashionable[i]}
# the vector of possible infector nodes
pInfector <-infected
# the vector of echoInfector
echoInfector <-c(rep(0,size))
# the network which denotes the diffusion
of old style of expression
nwi <-societyS
# the network which denotes the diffusion
of new style of expression which is "newly"
transmitted by ritsuko.
# the beginning condition of this network is
also denoted by a square matrix having size
row and size column, all elements of which
are zero.
nwr <-matrix(0,size,size)
# the information transmitting capability
```

```
of each node
# assume that every node has the same degree of capability if the distance between the relevant pair of actors is fixed.
# The capability of respective nodes is already denoted by their respective centrality.
# τ is the variable to generate the probability that a node successfully receives an arc from another node.
# the said probability gradually decreases as the distance between the possible information transmitter (the receiver of an arc) and the possible recipient (the sender of an arc) increases.
τ <-default[5]
# a vector preparing a binary that is used to decide whether an arc sent by a possible recipient of information reaches a possible transmitter of information.
bi <-c(1,0)
# define the number of instances ("nInstance")
nInstance <-default[6]
# define the impact of echo
echo <-default[7]
# a vector which decides the color of each node.
vcol <-c(rep(gray(0.4), size))
for (i in 1:size){
if (fashionable[i]==0){
vcol[i] <-"white"}}
# the size of each node in the graph.
vsize <-c(rep(1,size))
for (i in 1:size){
if (fashionable[i]==0){
vsize[i] <-2}}
vsize[ritsuko] <-3
# the number of sides of each node in the graph
vsides <-c(rep(50,size))
for (i in 1:size){
if (fashionable[i]==0){
vsides[i] <-3}}
vsides[ritsuko] <-50
nw <-nwi + nwr
tiff(file="000.tiff")
gplot(nw, gmode="graph", vertex.col=vcol, vertex. cex=vsize, vertex. sides=vsides, label.lty=0)
dev.off()
# the degree of sanitization by ritsuko by calculating the density of nwr.
cat(gden(nwr), "\n", file="ritsukodensity.csv", append=TRUE)
# 001 and following instances
# name of the files to record graph images
for (q in 1:nInstance){
p <-q*10
file0.name <-sprintf("%03d.tiff", p)
s <-p + 1
file1.name <-sprintf("%03d.tiff", s)
# ritsuko diffuses new style of expression
# prepare the distance matrix of the network which can be used by ritsuko and pSanitizer.
# the network is the total of societyS and nwr
nwforR <-societyS + nwr
# generate the adjacency matrix of nwforR
for (i in 1:size){
for(j in 1:size){
if(nwforR[i,j]> 1)
nwforR[i,j] <-1}}
# generate the distance matrix of nwforR.
nwforRd <-geodist(nwforR)$gdist
# each node sends arcs to pSanitizer at the probability determined by τ and distance
for (i in 1:size){
iarcsV <-c(rep(0, size))
coli <-nwforRd[cbind(1:size), i]
iprobV <-c(rep(0,size))
for(j in 1:size){
iprobV[j] <-exp(-coli[j]/τ)
# the probability increased when node j is an echoSanitizer
if (echoSanitizer[j]==1){
iprobV[j] <-exp(-coli[j]/(τ *echo))}
p <-c(iprobV[j], 1-iprobV[j])
iarcsV[j] <-sample(bi, 1, prob=p)*pSanitizer[i]
iarcsV[i] <-0
nwr[j,i] <-nwr[j,i]+ iarcsV[j]}}
# renew the vector of sanitized nodes
# sanitized nodes are no more pInfectors nor echoInfectors
rowR <-rowSums(nwr)
for (i in 1:size){
```

```
if (rowR[i]〉=1){
sanitized[i] 〈-1
pSanitizer[i] 〈-1
pInfector[i] 〈-0
echoInfector[i] 〈-0
if (vcol[i]!="white"){
vcol[i] 〈-gray(0.9)}}}
# renew the vector of echoSanitizer
colr 〈-colSums(nwr)
for (i in 1:size){
if (colr[i]〉=1){
sanitized[i] 〈-1
pSanitizer[i] 〈-1
echoSanitizer[i] 〈-1
infected[i] 〈-0
pInfector[i] 〈-0
echoInfector[i] 〈-0
vcol[i] 〈-"white"}}
# echoSanitizers cuts off the arcs received by them in nwi
for (i in 1:size){
for (j in 1:size){
if (echoSanitizer[i]==1){
nwi[j, i] 〈-0
nwi[i,j] 〈-0}}}
for (i in 1:size){
if (fashionable[i]==0){
vcol[i] 〈-"white"
sanitized[i] 〈-1
pSanitizer[i] 〈-1
echoSanitizer[i] 〈-1
infected[i] 〈-0
pInfector[i] 〈-0
echoInfector[i] 〈-0}}
# the conditions of the society.
nw 〈-nwi + nwr
nwg 〈-nw
for(i in 1:size){
for(j in 1:size){
if (nwg[i,j]〉1)
nwg[i,j] 〈-1}}
tiff(file=file0.name)
gplot (nwg, gmode=" graph", vertex.col=vcol, vertex.cex=vsize, vertex.sides=vsides, label.lty=0)
dev.off()
# the degree of sanitation by ritsuko by calculating the density of nwr.
for (i in 1:size){
for (j in 1:size){
if (nwr[i,j]〉1)
nwr[i,j] 〈-1}}
cat(gden(nwr), "\n", file="ritsukodensity.csv", append=TRUE)
# old style of expression revives
# the distance matrix of the network which can be used by pInfector.
# a network which is the combination of societyS and nwi
nwfori 〈-societyS + nwi
# generate the adjacency matrix of nwfori.
for (i in 1:size){
for(j in 1:size){
if(nwfori[i,j]〉1)
nwfori[i,j] 〈-1}}
# the distance matrix of nwfori.
nwforid 〈-geodist(nwfori)$gdist
for (i in 1:size){
iarcsV 〈-c(rep(0, size))
coli 〈-nwforid[cbind(1:size), i]
iprobV 〈-c(rep(0,size))
for(j in 1:size){
iprobV[j] 〈-exp(-coli[j]/τ)
if (echoInfector[j]==1){
iprobV[j] 〈-exp(-coli[j]/(τ*echo))}
p 〈-c(iprobV[j], 1-iprobV[j])
iarcsV[j] 〈-sample(bi, 1, prob=p)*pInfector[i]*fashionable[i]*fashionable[j]
iarcsV[i] 〈-0
nwi[j,i] 〈-nwi[j,i]+iarcsV[j]
}
}
#
rowi 〈-rowSums(nwi)
for (i in 1:size){
if (rowi[i]〉=1){
infected[i] 〈-1
pInfector[i] 〈-1
pSanitizer[i] 〈-0
echoSanitizer[i] 〈-0
if (vcol[i]!="black"){
vcol[i] 〈-gray(0.4)
}
}
}
#
coli 〈-colSums(nwi)
for (i in 1:size){
```

```
if (coli[i]〉=1){
infected[i]〈-1
pInfector[i]〈-1
echoInfector[i]〈-1
sanitized[i]〈-0
pSanitizer[i]〈-0
echoSanitizer[i]〈-0
vcol[i]〈-"black"
}
}
#
for (i in 1:size){
for (j in 1:size){
if (echoInfector[i]==1){
nwr[j, i]〈-0
nwr[i, j]〈-0
}
}
}
#
for (i in 1:size){
if (fashionable[i]==0){
vcol[i]〈-"white"
sanitized[i]〈-1
pSanitizer[i]〈-1
echoSanitizer[i]〈-1
infected[i]〈-0
pInfector[i]〈-0
echoInfector[i]〈-0
}
}
# plot the conditions of the society
nw〈-nwi + nwr
nwg〈-nw
for(i in 1:size){
for(j in 1:size){
if (nwg[i,j]〉1)
nwg[i,j]〈-1
}
}
#
tiff(file=file1.name)
gplot (nwg, gmode=" graph", vertex.
col=vcol, vertex. cex=vsize, vertex.
sides=vsides, label.lty=0)
dev.off()
#
}
# end of the code
```

〈参考文献〉

Bonacich, P. Power and Centrality: A Family of Measures, *American Journal of Sociology*, vol. 92, No. 5 (1987) 1170-1182

Freeman, L. 2004, *The development of social network analysis-A study in the sociology of science*, Empirical Press, Vancouver, Canada

Kahneman, D. 2012, *Thinking, fast and slow, Penguin*, London, United Kingdom

Prell, C. 2012, *Social network analysis: history, theory & methodology*, SAGE, Los Angeles, United States science, Empirical Press, Vancouver, Canada

Scotchmer, S. *Innovation and incentives*, MIT Press 2004, Cambridge, Mass., United States

Scott, J. 2013, *Social network analysis*, 3rd edn, SAGE, London, United Kingdom

Thaler, R. H. & Sunstein, C. R. 2009, *Nudge: improving decisions about health, wealth, and happiness*, Yale University Press, New Haven, United States

鈴木努『R で学ぶデータサイエンス 8　ネットワーク分析』（共立出版、2009 年）